

哲學研究

第三百八號

第二十六卷
第十一冊

現實の形而性と形而上性（承前）

土井虎賀壽

序論　　ロゴスの現實性と美の眞實性

三

吾々は從來のあらゆる世界觀、特に人間學が究極に於ては『素質的範疇』の支配をうけてゐることを見、従つて原理的には素質決定論に陥らざるを得ぬ所以を究明した。思考の立場から照明せられ得る理性或は本質の支配は云はゞ合理的素質による決定論であり、かゝる決定論を破つたランケの神祕主義にあつても尙ほ超理性的な法則をもつて活動現來する人類の素質が前提されてゐたのである。そしてこのやうな『素質的範疇』が支配する限り、人間の主體的活動はその獨自的な主體性と活動性の意義を喪失して、實質的には人間に内在する客體的な素質とその決定論的展開以外に何事の成立もが許され得ざるに到る。このやうに人間の主體性がそれに固有な獨自性を喪失することは、吾々の日々の生活がその充實した意義を奪はれ、かくて人間的な主體性の活動に内面的交渉をもつ形而上學的或は神的原理が

その存在理由を奪はれる。ランケがヘーゲルの理性主義による人間及び神への冒瀆を脱却しようとした神祕主義の立場そのものも未だ決して充分な主體性確立の道ではあり得なかつた。吾々はこのやうに考へ來つて『素質的範疇』を原理的に破つた『性格的範疇』を要求し、この範疇を確立するためにそのものもつ原理的構造の分析に進まうとするのである。

『性格的範疇』の構造分析に進む基礎的出發點として吾々はゲーテの文章を引用した。ゲーテの引用文に於てその前半は『敬虔性』が人間にとつて如何なる意味と使命をもつかを語り、その後半に於てはかゝる『敬虔性』の三つの具體的な現實形態を記述してゐる。吾々は先づ前半に語られてゐる『敬虔性』の意味と使命について問題を見出さなければならぬ。ゲーテは自然が人間に對して慈愛にあふれた母胎であつて、人間が人間としての生活を遂るに必要な限りのあらゆるものが人間の出生と共に自然から賦與されて居り、人間はかゝる天賦の才能をそのまま展開することを義務とする、否積極的に人間の活動を待つまでもなくかゝる才能そのものがおのづからにして自己を展開すると語つてゐる。いふまでもなくこゝに語られた自然はゲーテの生涯を支配するスピノザ的自然であり、萬物の生命の原理としての神的自然でなければならぬ。かくの如き自然によつて出生と共に人間が賦與せられるものは言葉の最も自然な意味で『素質』にほかならない。人間は神的自然から生活に必要なあらゆる『素質』を興へられ、人間生活の實質はかゝる『素質』の展開によつて充たされる。併し乍ら、吾々の如く從來のあらゆる世界觀が『素質的範疇』による決定論的冒瀆を包藏するといふ問題から觀める時この神的自然からの恩恵と賦與とは恐るべき禍惡を封入された惡魔の壺でなければならぬ。そのものとしては如何に豊かな實質を擔つてゐるにしろ、それらが『素質』として興へ

られたものである限り、その由來と根據を人間の自主的活動以外にもつものであり、従つて實質的には自己に屬するものであり得ない。外來的に與へられたものであつても同化され得るならば自己に屬することを許される。『遺産は獲得する主體活動によつて始めて相續せられ得る』Die Erbe muss erworben werden. 獨自性をもつた主體性の自主的活動によつて同化され獲得されて始めて遺産も亦自己のものとして相續せられ得るのである。同化獲得の主體活動なくして外來的な賦與は自己に屬するといふ意味をもたぬ。併し同化獲得といふことが成り立つには獨自性を保證された主體性が確立されなければならぬ。然るにスピノチスムスの立場にあつては人間の活動そのものが自然から即ち神からの天賦である故に、若し同化獲得の活動が起るとすればこの活動自身が天賦の素質の展開そのものにほかならない。凡てが外來的な、従つて客體的な『素質』に根據するこの世界觀にあつては、『素質』を自己に化するといふことさへも許され得ない。本來は客體的な『素質』を實質的に同化し主體化するためにも『素質的範疇』を破つた立場で始めて可能にせられる。だからして人間が積極的に働かなくても天賦の素質がおのづからにして展開するといふことは表面から見れば自然の恩恵であり人間の幸福であらうけれども、その實質を裏返して見ればあらゆる活動が素質決定的であり、自然が全面的に自己を主張して、人間の獨自的な主體性はその活動と存在の理由を奪はれ盡してゐることを意味する。

『自然誕生』としての人間はこのやうにして、その素質に於て如何に豊かな内容を恵まれてゐようと、その主體性の原理を自己に持たぬところの、従つて存在理由を内在せざる存在であらざるを得ない。而して存在理由を内在せざる存在は無に等しい。自然的人間は無的存在であらざるを得ない。このやうな結果が惹き起される原理的な根據は何

處にあるのであらうか。換言すれば『素質的範疇』の根據は何處にあるのであらうか。

世界觀の原理を自然に措くこと、宇宙の原理を實體に見出すこと——こゝに『素質的範疇』の根據がある。宇宙の原理として自然が定立せられる限り、この自然が實體として萬物を支持すると考へられるにしろ、或は原因として萬物を産出すると考へられるにしろ、凡そ實體及び因果性にあつては實體から偶性へ及び原因から結果へと、方向的に原理的依存關係が立てられる。それ故かゝる關係に立つ一方の側は、直接にそれ自身の存在理由をもち、従つて最初からそれ自身の存在をもつもの、換言すれば永遠的原理的であつて生成誕生せざるものであらざるを得ない。そして他方の側は逆に、それ自身の存在理由をもたぬ從屬的なもの、原理的でなくして他に媒介されて始めて生成誕生するものでなければならぬ。自然はこのやうな關係に於て最初から、即ち何ものにも媒介されないうで永遠にその存在が決定せられてゐるものであり、従つてたとへ活動するにしてもそれは永遠に決定的な活動であつて、——決して活動によつて創めて、自然が自然に成るといふやうなことは考へられ得ない。創めて成るといふことを許さぬ永遠なる存在性が自然のもつ最も本質的な規定である。而して創めて成るといふことは或る特定の時節に存在性を獲得することであるから、そのやうな存在は自己にならぬ過去の時を前提し、自己が自己ならぬものから自己になる時の創造性を含蓄する。即ちそのやうな存在は時節性を原理とするものである。時節性は自己が創めて自己に成る創造的な時の瞬間を意味するものである。従つて時節的存在性は時間を排除する永遠性の立場で成立し得ないことはいふまでもない。實體性或は原因性として自然が立てられる時、勿論自然は永遠なるものとしてあらゆる生成に先立つてその存在が決定せられてゐる。そしてそのやうな形で生成と時間を超えた永遠性の故に自然は神的な第一原理と考へられてゐるので

あつて、從來の世界觀にあつてはさういふ永遠性をしか考へようとしないのであつて、その意味に於て苟も世界觀の第一原理に關する限りパルメニデスの立場が嚴守され來つたのである。そして第一原理に關するこのパルメニデス主義そのものこそ——『素質的決定論』の由つて來る根據でなければならぬ。何となれば第一原理がパルメニデス的に永遠に決定的な存在性に於て不動であり、且つこの原理が實體性及び因果性に於て萬物を一方向的に支配するのであるから、宇宙の決定論的存在性、従つて『素質的範疇』支配は必然的な且つ當然な歸結でなければならぬ。そして特に強調されなければならぬことは、實體性或は原因性としての自然がその永遠的原理性の故に『時節性』を排除せざるを得ぬことに對應して、他方の項をなす偶性或は結果性としての萬物がその生成的從屬性の故に『時節性』を包藏し得ざることである。この際萬物は一方向的に自然の支配をうけて『素質』決定的である故に、萬物の萬物としての存在性は悉く自然の存在性にほかならず、萬物が萬物としてもつ獨自の存在性は許され得ない。それ故萬物の生成誕生といふことは實質的には自然そのものの展開にほかならず、萬物が萬物として成立することを意味しない。換言すれば萬物の成立は永遠なる自然の展開を意味し、創造的な生成としての『時節性』の成立する餘地が許されてゐない。『自然誕生』は永遠なる自然の一展開であつて、未だあらゆるものが創造的に生成する『誕生』ではない。『時節性』としての眞實の『誕生』をこゝに見出すことは出來ない。

ゲーテが引用文の前半に於てスピノザ的に語る限りにあつては『素質的範疇』の決定論的支配が切實な感恩をもつて述べられてゐる。本來的に人間への禍惡を封入した自然の賦與について感恩をこめて物語るゲーテは、禍惡を祝福に轉換するアルキメデスの槓杆をもつてゐるからのである。『素質』的決定はその内容が豊かであればある程に實

質的禍悪は増長するのであるけれども、アルキメデスの槓杆をもつたゲーテにとつてはかゝる禍悪をその豊かさの増長のまゝ自からの主體性に同化轉入し得る故に限りなき感嘆の語調を響かせてゐるのである。主體の獨自性を『自然の外』に確立し得るゲーテにとつて『素質』はそのまゝ慈愛のこめられた自然の『遺産』として同化獲得され來るべき運命に置かれてゐる。

禍悪を祝福に轉換するアルキメデスの槓杆——これは自然の外なる『一點』を確立することで充分な筈である。故にゲーテは語つたのである、——自然はありとあらゆるものを人間に賦與した、たゞ『一つのもの』だけを除いて、と。『自然の外』なる『一つのもの』を明確に把握したことがゲーテの文章の前半をゲーテ的世界觀の深さに支へ、スピノザを包む大きさに到達せしめてゐるのである。『一つのもの』ではあつても『自然の外』に立ち得る『一點』は決定的な人間學的眞實であり、物理學的に單なる假定に止まらざるを得なかつた事件が人間學的に最も現實的な事實性をもつて來たのである。だからゲーテは他の場所で語つてゐる。

「俺の立つ場所を興へてくれ！」 アルキメデス

「汝の立つ場所を占領せよ！」 ノーゼ

「汝の立つ場所を主張せよ！」 ゲーテ

『自然の外』なる『一點』、換言すれば『素質的範疇』を破つた『一つのもの』は、——「興へよ」と假定的に要請せられるのではなく、「占領せよ」と單に主體的に命令せられるのではなく、人間が人間である限り人間歴史の各『時節』に現實性をもつて成立してゐる嚴然たる事實である。だから吾々は人間歴史の主體としてこの立場を『主張する』權利と義

務とをもつのである。この『一つのもの』は分量的には萬對一でありつつ萬を轉換する一であり、永遠なる自然的宇宙を『時節化』する人間誕生の原理でなければならぬ。この一なくして人間は人間でなく、この一によつてあらゆるものが人間に同化歸一される一である。だからゲーテは語る、——而もこの一つのものは人間があらゆる側面にわたつて人間であり得ようがためにあらゆるものが懸けられてゐるものである、と。人間が『自然誕生』として人間であるのではなく、『素質的範疇』によつて人間の原理を把握すべきでないとする独自の人間學がこゝに明確にゲーテによつて代表されてゐるのである。

『素質的範疇』を破り『自然の外』に立つこの一つのもの——ゲーテによつて『敬虔性』*Erfindele* とよばれたものは如何なる構造と本質を擔ふのであらうか。先づ注意すべきことは、このものが決して『素質』の如く人間内在的でなくして本來的に人間超越的であることである。『素質』は人間の内に宿る自然の賦與である故に人間をそれだけ抽離する時その内に宿るものとして把握せらるべきものである。然るに敬虔性は人間の内に宿るものでなくして、人間が他の何ものかに出會ふ時の關係として成立するものである故に、他の何ものかへの係りを抽象して考へられ得ざるものである。人間を人間としてそのもの丈けで考へようとする人間學の立場では把握出來ぬ本質をもつたものである。人間が他の何ものかに出會ふ現實の生活の場面、即ち『境位』*Situation* から抽象されてそのものとして丈け考へられた人間にあつては敬虔性は成立しない。そしてこのやうに人間をそのものとして丈け見ようとして、現實の境位に立つ具體性から任意に抽象し得るところに——人間を本質的或は素質的範疇によつて理解し得るところ從來の人間學の抽象的傳統がある。人間性の眞實は人間が現實に他のものと交渉當面する境位に於てのみ把握せられ得る

のであつて、境位性が人間存在に内面的聯關をもち、人間の人間の原理性が人間超越的境位性に成立することは決定的な事柄であらざるを得ない。境位性は決して人間存在にとつて偶然的外面的な出來事ではなく、反つて人間存在の人間存在たる原理的構造が境位當面性にあることが強調されなければならない。『素質的範疇』に支配された從來の人間學が境位性を偶然的な事件と考へ、それから抽離して人間を考へようとしたことは、人間内在的素質に人間を見出さうとする立場の當然に陥つた抽象であり、そのやうな立場に立つ限り人間存在の獨自性を保證し根據づけし得ざることはいふまでもない。

敬虔性はこのやうに、人間内在的素質ではなく人間超越的境位當面性でなければならぬのであるけれども、同時に人間内在的素質に係はりをもたぬものではなくしてむしろ決定的にそれに聯關するものである。尤も如何なる境位當面性と雖も人間内在的素質に緊密に係はり、人間内在的素質に基づきそれから出でる素質的活動として境位に當面するものである。従つて敬虔性が特に決定的に内在的素質に係はりをもつといふことは、他の境位當面性が内在的素質に聯關する係はりとは原理的に峻別せらるべき本質的構造をもつたものでなければならぬ。一般に境位當面性が素質に支持されむしろ素質的活動として成立するに對して、敬虔性は人間内在的素質を全面的に否定轉換する限、境位たるところにその特異性をもつものでなければならぬ。では素質性の否定轉換たる敬虔性の限界境位性は具體的に如何なる構造をもつのであらうか。

一般に境位當面性は人間内在的立場でなくして、人間が他の何ものかに當面することを意味するのである故、それは事柄の必然として單なる *Dank* の立場であることを許されない。思考は本質的に存在の内容 *So sein* を問題に

するものであつて、決して存在の事實性 Darwin を保證する権利をもたない。存在の事實性はデイルタイの分析したやうに意慾的活動に對する抵抗或は障礙としてのみ成立し得るものである。併し乍らこのやうな抵抗或は障礙として成立する事實性は、その成立の條件を更に綿密に分析される必要をもつ。何となれば若し人間が全く身體性をもたぬ存在であるとすれば、たとへ意慾的な要求が充實を見出し得ないとしても、その際要求を制限するものは單なる觀念であつて事實性をもたぬであらうからである。それ故に事實性が事實性として保證せられる條件は單に意慾的主體ではなくして、意慾に貫かれ意慾を客體化する人間の身體性でなければならぬ。人間が身體をもち、從つて人間の意慾が内部觸覺に於て客體化されてゐる故に始めて、かゝる客體化された意慾に對する抵抗が外部觸覺的に『事實性』を保證せられるに到るのである。而して事實性が單なる意慾ではなく、身體に於て内部觸覺化された意慾を條件とすることは以下順次に展開されるであらうやうに極めて重大な幾つもの結論を喚び起すところの決定的な事柄なのである。

元來『自然誕生』としての人間、即ち生物としての人間は、生命意慾の中心勢力が物質の世界からその一斷片を區切りとつて内包的に貫徹支配することによつて成立する一つの體系にほかならない。ベルグソンのいふ如く眼あるが故に見るのでなく、見ようとする生命意慾によつて眼といふ内包化された物質が成立するのである。本來は外延的空間性を本質とする物質の斷片が内部生命の中心勢力による支配領域としてエラン・ピタルの方向に内包化され時間化されたものが人間の身體である。かゝる身體を支配領域とすることを離れて人間は存在することが出来ない。而して支配領域としての身體は内部觸覺として不斷に人間の體驗を充たし、それが生命の中心勢力の體驗を成す我の中心に

統一されてゐるのである。この中心生命力の體驗をパッションとよぼうと思ふのであるが、このパッションとしての私の體驗は能動的なエラン・ビタルの生命意慾の體驗として支配領域に於ける内部觸覺を全面的に貫徹しつつ統一してゐるのである。身體の全面に於ける内部觸覺は生命意慾の中心的パッションに貫かれ支配されてゐる故に、生物としての人間存在の全體が不斷に緊張したエラン・ビタルの體系を成し、従つてかゝる生命意慾への抵抗が外部觸覺的に事實性として意味づけられる。エラン・ビタルとしての意慾的緊張の體系を豫想することなくして事實性の保證される條件はなく、而もかゝる體系は支配領域としての身體性を必然的に含む。中心勢力としてのエラン・ビタルの成立そのものが身體性を支配することを離れてはエラン・ビタルたる本質を喪失するのである。それ故に人間の存在にとつて身體性、従つて内部並びに外部觸覺は基礎的な意義をもつのであつて、事實を事實性に保證する唯一の條件がこゝに見出されるのであつて、視覺聽覺の如きものはそのものとしては單に觀念的であつて何等かの形で觸覺に媒介され還元され得る限りに於てのみ間接に事實性を保證し得るに過ぎない。而して視覺聽覺がそのものとしては單なる觀念を示すに過ぎぬことは、そのまゝ思考の活動についても語られ得るのであつて、思考も亦觸覺に媒介されることなくしてそのものとしてだけ活動する限り觀念性、即ち存在の單なる内容に係はり得るのみである。何等かの形で觸覺的に事實性が保證せられるものを媒介とすることなくしては、如何なるものも單なる觀念に止まつて事實性と客體性をもつことが出来ない。

それ故に吾々の當面の問題を成す境位當面性に於て人間が何ものかに出會ふといふ時、この出會ひが現實的であるためには當然に人間自身が身體的な主體でなければならぬ。境位性を離れて人間の現實性を把握し得ないといふこ

とはその前提としてこのやうに先づ人間が身體的人間として成立することを抽象しないのでなければならぬ。従つてヘーゲルの如く思考の立場に立つて、主體的理性と客體的現實との『媒介』の問題が解決せられるといふことは許さるべからざることであつて、事實ヘーゲルの『媒介』は嘗ての『神の存在論的證明』に歸着する獨斷論にほかならない。ヘーゲルはカントを批判して、カント的理性は單に主體的要請に止まつて客體的現實性を自己の外に残す故に有限にして不完全であり、従つて本來絶對的であるべき理性の眞實にふさはしからぬものとして、眞實に理性的なるものは同時に現實的でなければならぬとする。これは思考の立場で最も完全な存在であると判定される理性的存在に對してその完全性の故に現實性を歸屬せしめる存在論的證明そのものにほかならぬのであつて、現實性が境位當面性としての身體的主體の生活意欲の立場で始めて成立することを無視する獨斷的抽象であらざるを得ない。人間がその成立の由來からして身體的存在であり、且つそのやうな身體的存在として境位當面的であることによつてのみ事實性並びに現實性が保證されるのである。身體的な境位當面性なくして事實性がなく、かゝるものを媒介にすることなくしてはあらゆるものが單なる觀念性に陥ることを吾々は片時も忘却してはならない。このことはそのものとしては小さなそして素朴な事柄ではあつても、こゝから限りなく重大な事柄が根據づけられて來るのである。

境位當面性に於て人間は身體的に客體化された生命意欲を媒介として嚴然たる事實に當面する。こゝに人間の現實的な生活が成立する。では限界境位としての敬虔性に於て人間の現實は如何なる姿を示すであらうか。敬虔性の成立は先づ第一に神聖なる戰慄の様相をもつて現はれる。素質的な意欲に支へられた人間が身體的に出會ふ事實的抵抗が絶對的な威力として人間を壓倒し來る時、人間は必然的に恐怖し人間の身體は必然的に戰慄する。而して絶對的な威力

に當面して人間が恐怖戰慄する際それが人間の全面的否定として作用する限り内部觸覺的戰慄が生命の中心に統一されてエラン・ピタルそのもののパツシヨネトな緊張の極限に到達する。かくして生命の中心勢力に集中凝結して根原的に成立する生命そのものの戰慄が『苦惱』にはかならない。苦惱の極限に於て周邊的身體の戰慄が中心的な靈魂の戰慄に集中せられ、かくしてこゝに『自然誕生』としての人間の素質的根原が振蕩せしめられるのである。『苦惱』こそは素質的範疇の支配が破られようとする陣痛にほかならない。人間は『苦惱』の極限に於て自己の素質的根原が突破せられて、まさしく當面せる境位そのものの底に突入する。今まで境位のこちら側と向ふ側からの壓力に對抗してゐた人間が、こちら側と向ふ側との力の抗争によつて築かれてゐた境位の云はゞ絶壁にさうてその底深くに突入して、この境位そのものの底にあつて新らしき生命と活動を開始するのである。一つの實例をとらう。死刑の場に出くはしたトルストイにとつて、これは一つの嚴然たる事實であつた。併しこの事實が單なる事實である限り、それはトルストイの身心を振憾させつゝトルストイは未だ従前のトルストイのまゝこの事實に對立してこちら側に立つてゐる。併しこの際の戰慄が全身を貫き全靈を振憾し盡した瞬間に、トルストイはこの境位のこちら側に立つ素質的位置を飛躍してこの境位當面性そのものの根柢に立ち、この根柢に立脚して「死刑は正しくない」と語らざるを得ない。この時「死刑」といふ事實はトルストイに當面する向ふ側の事實ではなくして、かゝる境位の根柢に立つトルストイにとつて自己の活動を要求しつゝトルストイに運命的に結ばれた神聖なる現實でなければならぬ。トルストイはこゝに神に面接し、神の告示に接したのである。境位のこちら側に素質的に立つトルストイにとつて『事實性』であつた「死刑」が、戰慄と苦惱の極限に於て素質的根原が破られて境位性そのものの根柢に飛躍した瞬間に單なる事實性ではなくて神の

示現性と成つたのである。換言すれば『事實性』が戰慄的に素質性の絶對否定として活動した『時節』に於て、トルストイはトルストイとして『人間に成つた』のであり、且つこの同じ『時節』に於て單なる事實性が『神に成つた』のである。人間が人間に『成る』ことと神が神に『成る』ことに於て『時節性』が成立する。人間はそのものとして内在的に見られる限り單に素質的であつて、従つて本質上素質的な人間が自己の力量をもつて素質を破ることは出来ない。人間の素質性が破られるには境位に於て當面する事實性による戰慄と苦惱に媒介されなければならない。併しかゝる媒介をなす事實性は單に否定的に働くものである限り否定による飛躍を用意することが出来ない。否定的な事實性に媒介されつつ境位の根柢に向つて飛躍し得るには事實性が既に神聖なる現實でなければならぬ。従つてかゝる飛躍によつて人間が人間と成るには神聖なる現實に媒介され、従つて神の支持を受けなければならない。併しこの神聖なる現實そのものがその神性をもつのは人間の飛躍によつて媒介されて始めて誕生するものである。人間の誕生と神の誕生とはこのやうにして互に媒介されつつ互を媒介するものであり、自己の媒介となるものを自己そのものが媒介するのである。ヘーゲルが『交互作用』の範疇とよんだものの深い意味はこのやうな構造になければならぬのであつて、かゝる關係に立つ二つのものは決してヘーゲルのいふやうに二つの實體ではあり得ない。實體は生成を排除する永遠である故に決して他の實體と交互關係をもつことが出来ない。人間が素質否定的に人間に成る時節は神が事實否定的に神になる時節であり、人間が人間に成ることによつて神が神になり、神が神に成ることによつて人間が人間に成るのである。『時節性』は境位に於ける空間的對立性が素質性と事實性との否定的轉換をとほして境位當面性の根柢に於て還元歸一される危機的生成を意味するものにほかならない。

主體性と客體性の『媒介』といふことはこのやうな姿をもつて苦惱と戰慄の危機に媒介されて始めて成立するものであつて、決してヘーゲルの如く單に觀念的な思考の内容ではあり得ない。敬虔性といふことも決して單に靜觀的な或は單に主體的な状態ではなく、人間存在がその全面的な素質否定の苦惱に直面する危機的轉換であり、且つそれを媒介として事實性が神と成る時節を意味する。神は轉換された人間の誕生に於て主體化された事實性として創造的に誕生するものでなければならぬ。自然は直接的永遠として必然的に自からを展開し、且つこの展開は萬物の方向に向つて一方向性をもつ故にたゞと分化し特殊化するのみである。この特殊化の方向が人間の人間への生成の時節に於て轉換せられて、人間が當面する事實性を根柢的に主體化することによつてこゝに主體性と客體性が還元歸一され来る。このやうに自然の分化的方向を轉換しつつ高次の還元歸一を成立せしむるところに——人間の主體的活動の獨自性を媒介的に包むところの神の世界原理性が成立するのでなければならぬ。『自然誕生』ならぬ第二の人間の誕生に於て神はその世界原理としての自然支配を成就するのでなければならぬ。

この際特に注意せらるべきことは『交互作用』の範疇が決してヘーゲルに於ける如く『概念』の範疇に展開すべき途中の段階を意味するものでないといふことである。人間が人間に成り、神が神に成ることによつて、事實性が主體化せられる時、この主體性と客體性との媒介は決してヘーゲルの『概念』に於けるが如く一元的な自己内還歸ではなく、事實性は何處までも事實性としての客體性を保持しつつ主體性に貫徹せられるのである。ヘーゲルの如く透明なる『概念』の一元性に還元されるといふことは實は客體性を溶解して純粹の主體性に歸入せしめ得ることを意味し、かゝる立場はヘーゲルの如く事實性の獨自性を抹殺する觀念論に於てのみ許され得る抽象でなければならぬ。吾々

の立場に於ける『媒介』は事實性をその容體的獨自性に於て保持しつつそれを境位の根柢に飛躍した主體性によつて神聖なる現實に轉化する決意の表明でなければならない。「死刑は正しくない」とトルストイが靜かな語調で語つたことは神の啓示に對する行動への決意を表明するものであつて、決して主體の一元に到達した『概念』的な觀念性ではあり得ない。事實性は事實性の壓力と權威を保持したまゝで主體的活動に支持貫徹されるのである。それ故に所謂宗教家達にとつて許すべからざる冒瀆と響くであらう表現がゲーテに見出されるのである。

『敬虔性は決して目的でない、それは最も純潔なる心情の安靜をとほして最高の文化に到達する爲の手段である。この故に、敬虔性を目的とし目標とする人々は多くの場合偽善者となつて了ふことが注目せられる。』

(未完)